みちくさ言語療法―ことばの発達と障害の臨床より―

(1)　話しづらさの障害学

工藤芳幸

言語聴覚士という少数派

私は言語聴覚士（以下、ST）という仕事をしている。正確には大学で ST 養成の仕事をしながら、児童発達支援施設・放課後等デイサービスの非常勤 ST として、ことばやコミュニケーションの発達に何らかの課題がある子どもやその家族と関わっている。

ところで ST という仕事、読者の皆様はご存知だろうか。ことばやコミュニケーションや食べることに何らかの障害や困難を抱えている人を支援する仕事であり、医療職の 1 つとして位置づけられている。病院のリハビリテーション科に勤務していることが多いが、介護老人保健施設や児童発達支援センターなどの福祉領域、学校関連の教育領域でも働いている。アメリカではなりたい職業ランキングでも上位に入る職種なのだが、日本での知名度は低い。国家資格になったばかりの公認心理師は第 2 回の国家試験を終えた段階で、3 万 6,438 名の合格者を出しているが、言語聴覚士は 2019 年の第 21 回まででようやく 3 万 2,863 名。同じリハビリテーション関連職種の理学療法士（PT）が 17 万 2,285 名。ST は少数派なのだ。対象としている年齢層は子どもから高齢者まで全てだが、子どもの ST はさらに少数派である。対象としている障害は、失語・高次脳機能障害、摂食嚥下障害、運動障害性構音障害、音声障害など。発達の領域では、知的障害、自閉症スペクトラム障害、ADHD、学習障害、構音障害、吃音、脳性麻痺。それから聴覚障害と多岐にわたる。私は子どもの発達支援が専門で、高齢者分野での経験はない。

ST はスピーチセラピストとも呼ばれるため、音声や発音をきれいにするトレーナー、絵カードを見せてことばを話すリハビリをする仕事、高齢者の摂食嚥下障害などのリハビリテーションを担うといったイメージがあるように思える。どれも間違いではないが、全てではない。ST の仕事の内容についてわかりやすく説明するのは難しいが、大まかに言って、人どうしが生きていく上で重要なことばやコミュニケーションの困り事について、その解決や解消を手助けする仕事だと私は考えている。その対象や方法についてはいろいろあり、狭義の機能訓練から、コミュニケーション手段や環境の調整、本人や保護者への助言などがある。

ST の仕事のことや、ことばやコミュニケーションの障害の全貌を伝えるだけの力は私にはない。長らく自分は職人的な仕事で良いと考えてきたのだが、経験したことを

自分の中にだけ留めておくのではなく、少しでも共有することに援助的な意味があるのではないかと思うようになった。学生にはST養成というスキーマの中でそれを伝えているが、ここではそれとは違う道筋、少し広い文脈で、ことばやコミュニケーションに困難さを抱えている人たちとの関わりから得たことを私なりに咀嚼し、物語ってみようと思う。

機能性構音障害を持つ子どもたち

ことばやコミュニケーションの困難さの1つに、ことばの発音が上手くいかず、言いたいことが上手く伝わらないという状態があり、それは構音障害と呼ばれている（発音のことを医学領域では構音と呼ぶ）。構音障害（articulation disorders）とは、「話し手が属している言語社会の音韻体系（日本語だと50音）の中で、話し手の年齢からみて正常とみなされいてる語音とは異なった語音を産生し、しかもそれが習慣化している場合」とされている（岡崎, 2001）。たとえば、「カボチャ」という単語を言おうとしたときに、「タボチャ」と発音されてしまい、聞き手には上手く通じないという事態が起こる。誤り音が1つだけでもたびたび通じないことが起こるが、いくつもの音が思った通りに出せないとなると、言いたいことがほとんど伝わらない。脳血管障害などによる麻痺や口蓋裂などで起こる構音障害をそれぞれ運動障害性構音障害、器質性構音障害と呼ぶが、こうした問題がないにも関わらず構音障害が起こっている状態を機能性構音障害と呼んでいる。子どものSTをしていると、「発音が上手くいかない」という相談を受けることは非常に多く、実際に構音のみが問題となる場合もあれば、言語発達そのものの遅れなどが背景に隠れている場合もある。

子どもの構音障害の第一の特徴は、子どもは音の習得過程にあり、言語発達と深い関係があることだ。子どもは4歳頃になるとしりとり遊びなどをするようになるのが、これがことばの音（音韻）の側面に子どもが気づくようになった証拠の1つである。子どもの構音が正確に産生される背景には、頭の中にある語の音が、日本語として正しく表象されていることが必要だ。3歳頃にはおしゃべりが盛んにはなるが、まだ音韻の発達も舌の動かし方も不十分であり、この時期に上手く言えない音があるのは珍しいことではない。特に「さ行」「ら行」などは完成するのが6歳頃の音であり、3歳児が「サカナ」を「シャカナ」と言っていても心配することはない。ただし、通常の発達途上では見られない構音の誤りがあることもあり、概ね4歳を過ぎて発音が拙い、通じないということがあれば近隣のSTに相談するのが良いだろう。

「たかが発音のこと」と思われがちな面もあるが、構音障害によって発話明瞭度が低下し、コミュニケーションに支障をきたすと、言語発達にも心理社会的発達にも大きな影響を及ぼす。当事者は正しく構音しているつもりなのだが、どうしても思ったような音が出せない状況で、正しく言い直すことを指摘されたり、からかわれたりすることが続くと、友達とのやりとりが上手くいかなくなり、発話意欲の低下が起こる可能性がある。結果的に社会的な適応に問題を抱えることもある。きれいにハキハキとしゃべる、スムーズにしゃべるということに価値が置かれている社会において、そのようにしゃべれないということは疎外感や

孤独感を生むことにもつながるのである。

ST は機能性構音障害についてはある程度確立された訓練技術を有しており、数少ない「治す」ことができる言語障害とされている。ただし、知的障害や発達障害、不器用さのある子などの場合には、長期間の訓練が必要になることも多く、完全に治すことが難しい場合もある。

話しづらさがある当事者として

実は私にも「側音化構音」という機能性構音障害がある。正常構音では音の産生時に呼気が口腔の中央部から流出するが、側音化構音では呼気は口腔の側方から流出し、舌縁と臼歯とで音が産生される。「い」列の音や、子音の/s, ʃ, tʃ, dʒ/によく見られる。聴覚的には雑音が伴う耳障りな音で、「し」は「ひ」に、「ち」は「き」に、「じ」は「ぎ」に近く聞こえる。学齢期に達した子どもに見られる機能性構音障害の中では最も頻度が高い構音障害である。

私も子どもの頃は、言っていることが伝わらず、聞き返されることや、間違いを指摘されるということが非常に多かった。「か」行のうち、「き」の子音/k/が/tʃ/の音に近い歪み音（「ひずみおん」と読む）として産生されてしまう。そのときにどう対処したのかというと、「き」や「ぎ」がついている単語を言うことを回避する術を身につけた。類似の意味の別の単語を使うなど、できるだけ「き」や「ぎ」を使わないように、会話においてモニタリングをしていた。例えば、「ぎりぎり」なんてことは言えない。似たような「すれすれ」と言うとか、様々な工夫を凝らした。小学生の頃はこれでやり過ごした。こうした回避は吃音のような話しづらさを持つ子どもにも頻繁に見られる行動である。ただ、周囲との会話をためらうということはなかったと思う。努力の成果なのか、周囲の気遣いなのかわからないが、おそらく誤りを指摘され、からかわれるようなことは徐々に減ったのだろう。構音の歪みに関して最初期の記憶は、小学校に入ってからである。幼児期は自分の構音について認識した記憶がない。構音について特に意識した時期は小中学生の頃で、高校以降は部活にほとんど全てを賭けて（！）生きていたのもあって、あまり気にすることもなく日々が過ぎていた。大学を卒業して福祉施設に就職した後もむしろよくしゃべっていた方だと思うし、構音についてはそこまでの負い目ではなくなっていた。全く気にならないというわけではなかったが、主たる問題ではなかった。ただ、時には上手く通じないということがなくなったわけではなかった。

H 先生からのメール

転機は突然訪れた。最初の職場を退職して言語障害学を修めるために大学院生をしていたある日、講師の H 先生から 1 本のメールが届いた。何やら折り入って話があるという。恐る恐る H 先生のところへ出向くと、「工藤さんは側音化構音がありますよね」と切り出された。すでに大学院入試の受験勉強で構音障害というものについての知識を得ており、自分の発音のしにくさには名称があるということを知っていた。また、H 先生の講義も受けていたので一定の知識があった。何の話かと思って内心ドキドキしていたので「なんだそんなことかと思って「あ、はい」とほっとして返答したように思

う。H 先生曰く「今後 ST として仕事をする上で、構音訓練をする際に構音のモデルを出すことが必要になる。そのために側音化構音を治しておくのが良い。ただし、もう大人になっており、日常会話全てにおいて正しい音が出る（般化する）というゴールではなく、ST として構音指導をする際に、対象者の人に出して欲しい音のモデルを正確にできることが大事。そのあたりをゴールにして構音訓練をやってみませんか？」ということだった。構音訓練は H 先生がやってくださるということだったが、それだけではなかった。大学院のカリキュラムの中で、実際に機能性構音障害がある子どもが学内にある言語障害研究センターに来て、先生の指導の下で院生が構音訓練を実施するという授業があった。その授業で私も他の院生から訓練を受けるのはどうかというアイデアを提案してくれたのだ。構音訓練を受けることは私自身の学びにもなるし、クラスメイトも大人の機能性構音障害の訓練を経験することができる。また、対象者（私）から直接フィードバックも得られるというメリットがある。こうした説明だったように思う。私は二つ返事で受諾した。

クラスメイトから構音訓練を受ける

実技の授業でセラピスト役として子どもの構音訓練をさせてもらった時には、相当緊張した。準備して臨んだとしても初学者。実際にどの音が歪んでいてどの音が正しいのか、聞き分ける耳ができていない。つまり「評価」ができない。だから目標にしている音を強化するということが上手くできない。横に H 先生がついて、「ここ」とか「これ」とか影のように強化すべきポイントを教えてくれて、大汗をかいて何とか構音訓練したのが初めての体験だった。

そんなわけで自分がクライエントとなる回は気楽だった。10 人ほどのクラスメイトに囲まれ、セラピスト役の院生仲間がプログラムを立案して、私が大汗かいたように（否、他の院生はもっと上手だったような気がするが）構音訓練をしてくれた。練習用のノートも作成した。私が使うかも知れない単語を選択し、訓練経過を記述し、課題も作ってくれた。この授業ではまず構音検査を実施し、事前にプログラムを立て、それを H 先生に見てもらって訓練内容を検討するのだが、クラスメイトが私の訓練について考え、話しているというのがなんとも不思議な状況だと思った。嫌な気分ではない。こういうふうに自分のことを見る、見られるというのが初めてのことだったのだ。この時、私は初めて音の言いづらさについてオープンに、しかも詳細に話すことになった。カンファレンスでは私も含めてのディスカッションが行われた。もうだいぶ前のことなので、どんなことが話し合われていたのか詳細は忘れてしまったが、私の言いにくさについて配慮されて問われないわけでもなく、理不尽に誤りを直すように指摘されるわけでもなく、正当に扱ってもらえたという気がしたのは確かである。

この時の訓練+H 先生と空き時間で約束して実施してもらった訓練で私の側音化構音が完全に治ったわけではない（つまり日常会話で無意識に話していても誤り音にならない状態になったわけではない）が、この時から自分の話しづらさへの捉え方が変化し、問題の大部分が解消したのかも知れないと今になって思う（期せずしてリフレクティングを行っていたのだ）。少なくとも構

音訓練を受けたおかげで意識的に自分の構音をコントロールすることがある程度は可能になり、ST として構音訓練を実施するハードルを下げてくれたのである。

そのままを受け止める

構音訓練場面において、子ども本人から話しづらさについての訴えを聞くことは、それほど多くはない。多くは親からの要望によって状態を評価した上で構音訓練を開始する。しかし、当の本人の思いを無視して進めることはできない。ことばにできないことであっても構音訓練にどのように取り組む過程での行動から心の動きを窺うことができる。きっと皆気づいていると感じていてもそのことを言い出せないことや、もしそのことを話してしまったら、怒られる、バカにされる、きちんと話すように要求される…などの様々な不安、そして、ちゃんと話さないと認めてもらえないという存在の不安を抱えている場合がある。話しづらさを抱えている子どもへの構音訓練は、構音を治すということだけではなく、その子どものありのままの姿を認め、逆説的だがそのままの構音であっても良いという承認から始まるように思う。子どもの構音訓練とは、ただのトレーニングではない。専門職として訓練技術を高めることに異論はない。しかし、それと同じレベルで子どもをコミュニケーションの主体として認め、心の動きを想像し、話しづらさを正当に扱うことが極めて大事な援助なのである。

小さな傷は残されている

今でも私はそんなにきれいな構音で話すことが簡単ではない。疲労度が高い時には舌は私のコントロールから離れてしまうこともしばしばである。そして今も子どもに構音訓練を実施する前にはモデルを出す練習もしておく。現場で毎日のように構音訓練をやっていた時期は、こちらも毎日モデルを出しているので舌のコントロールも比較的なめらかなのだが、近年は大学での仕事が多くを占めていて若干舌がさび付いている感がある。正常構音モデルの練習は能動的な行為なので心理的負担はない。周囲からまるで当たり前のことのようにきれいに話すことさえ要求されなければ、特に障害として立ち現れることはない。だが、それを匂わされたときに、オープンに話せるはずのことであっても過去に受けた傷が身体をこわばらせる。たかが構音、されど構音である。そのことで長い間他者との関係を築くことにハードルを感じる人もあることは知っておいて良いことだと思う。

H 先生へ

今回この話を書こうと思ったのは、構音訓練を実施してくれて、その技術を教えてくれた H 先生への思いがある。実は H 先生は数年前に 50 歳の若さでこの世を去った。養成校の教員となった後、私もまた学生に構音訓練を実施してきたのだが、それは大学院生の時の経験があったからだ。H 先生には心から感謝しているが、そのことをきちんと伝えられていなかった気がする。この場を借りて御礼申し上げたい。

引用文献：岡崎恵子（2001）「構音障害」西村辨作編『ことばの障害入門』大修館書店